



馬耳東風

今月の異名は卯月である。大伴家持は「卯の花もいまだ咲かねばほととぎす 佐保の山辺に来鳴き響もす」(万葉集 1477) と平城京東北部の里山の佐保に住んだ。古典文学に触れた学生時代を思い出す方も多いことだろう。大伴家持が編集の中心だとされる万葉集は、奈良時代の8世紀後半に成立した現存最古の歌集である。雑歌・相聞・挽歌などの部立てで、巻十七以降は年月日順で歌体は短歌に限らず、作者が皇族・貴族から遊女・乞食までの広い階層にわたっているのが面白い。家持は月の異名の元となった植物のウツギの花で季節の到来を待ち、まだ咲かないうちやって来たホトトギスの声に魅せられ、地名を入れて詠んでいる。繊細優美な歌で、日本の季節を讃歌する懐かしい佐佐木信綱作詞の唱歌「夏は来ぬ」の原点を思い浮かべる。里山にウグイスが去来しては鳴き、ウツギの真っ白い花が咲き誇る頃、ホトトギスの「トッキョキョカキョク」が聞こえてくる。早朝の鳴き声は里に向かってここに居るぞと言わんばかりに、繰り返し民家の屋根を越えて響き渡る。ウグイスの巣に託卵し抱卵と子育てをすっかり託す運命共同体なのだ。同じ頃カッコウも夏鳥として渡来し、モズやホオジロ等に託卵、山林で繁殖して東南アジアに渡るという。これらがリンクしながら里山を生息圏にしているようだ。里山の下層植生の藪を好むが、外来鳥のガビチョウの侵入が目立ち、生息圏生態への影響が気掛りなこのごろである。

古典文学と植物を研究した植物文学者の松田 修は、万葉集に出てくる植物はほとんどが実用的価値を持つもので万葉人の生活に大きな役割を果たしたとし、登場する182種類を食用、薬用、染料、建築・工芸、医療用に分類、当時身近にあったものを記録したと注目している。最も多いのがハギでウメ、マツと続く。植栽された庭園に万葉歌碑を配置した情緒ある各地の万葉植物園の存在は、人々の視線に触れながら、万葉人の思いが感じられ訪れる人も多い。歌碑は万葉仮名に読みを添えて古代を静かに演出しているようだ。

また、都を遠く離れた陸奥国にまで及ぶ東歌は、方言を入れ安達太良や会津の地名を冠しており、ご当地ものとして興味を引かれる。東国の家族と離れる悲しさや、夫が遠くへ行ってしまう悲しさや不安、さらに無事に帰るよう祈りを込めた防人の歌は、一層古代のロマンを醸し出している。役人に連れられ任地の北九州までほとんどが徒歩で、運がよければ馬か船で、随分辛い旅だったに違いない。任期を終えても帰るに帰れない行き倒れの過酷さに思いを馳せる。

万葉集事典(中西 進 編)によると、動物ではホトトギスが最も多くウマ、カリ、シカ、ウグイスと続きイヌ、ウシはあるがネコは見当たらない。さて、野草のホトトギスはユリ科で秋に開花するが、ホトトギスの胸の斑点によく似た可憐な花だ。身近な音と姿形や香にも魅せられ、万葉人が体感した味わいのある季節が列島のあちこちにやって来る。(柏)